

国際日本研究センター 海外大学の日本語教育・日本研究調査
(オーストラリア・メルボルン)

宮城 徹

2010.8.20

当初の計画では、7月中旬から上旬にかけ個人研究のための初等中等学校訪問、教育省訪問を行い、国際日本研究センターの調査については、8月9日～13日に行う予定であった。しかし先方の都合などにより、順序が逆になった。その理由は以下の通りである。まず初等中等学校は、7月下旬に日本などからのホームステイ団体を受け入れている場合が多く、その対応に追われており、調査は8月以降にずれ込んだこと、一方大学は、7月中旬から授業に入ったところであり、まだ学生も教員も忙しくしている時期であったが、「合間を縫って早めに予定を入れておきましょう」という要望があり、予定を前倒しにする必要があったこと、お会いした3大学の教員からお話を伺える曜日が重なってしまい、同じ週に調査を集中させることができなかったことなどである。日本側教員が時間を取りやすい3月や8月はオーストラリアの大学の新学期開始の時期であり、今後の調査にあたっては、これらについて留意する必要がある。

次に、大学教員に対する調査で、特徴的であったことをまとめておく。まず調査項目に関して言うと、今回の対象大学に限って言えば、日本語教育の明確な目標といったものは、存在しない。各大学が目標としている最終レベルといったものも、教員から語られることはなかった。これは90年代初頭、第一の日本語学習ブームが訪れたときに、多くの学習者が「日系企業への就職に有利だから」といった幻想を抱き、それに後押しされるような形で教育機関側も過度な目標設定を立てざるを得なかった(?)ことへの反省でもあるかもしれないし、現在の多くの学習者が「ちょっと日本語をかじってみる」程度のレベルで去っていくという現状からかもしれない。またそのことは同時に、大学院レベルでの日本語研究、日本研究の停滞を意味しており、その部分に関する質問は、答えにくい現状があるようだ。

また、これは直接の調査項目ではないが、日本語を担当する大学教員は、教育の質を維持しながらも、高い研究業績が求められており、「それができないなら、大学教員の資格はない」というプレッシャーが常にあるということを誰もが語っていた。「査読つき論文を年間2本書くことで、かろうじて現状(今の地位)維持であり、それがこなせなければ、研究休暇は与えられず、授業のワークロードを増やされる。そのためになおさら、研究ができなくなるという悪循環。」「講師(日本で言う准教授)から上級講師(日本で言う教授)の給与体系に変わるためには、大きな研究費を取ってくるとか、学術書を書く必要が

ある。」といった話であった。

こうした状況に置かれている教員の方々に時間をさいていただき、お話を伺うことは、こちらにとってはたいへんありがたいことであるが、先方にはまことに申し訳ない気持ちもあった。また本センターの予定している本調査も、本当にこの方々のご苦勞に報いることのできるものになるかどうか、熟慮する必要があると切に感じた。

以下に聞き取りの概要について記すが、詳細についてはその内容上、口頭報告としたい。

モナシュ大学 橋本博子博士と面談（於 橋本研究室）

2010年7月28日（水）12：00～14：30

モナシュ大学はメルボルンの中心から南東 25 キロほどのクレイトンにメインキャンパス、他にもコーフィールド、バーウィックなどにキャンパスを持つ南半球最大級の総合大学である。 <http://www.monash.edu.au/>

- ・日本語教育・日本研究は現在 Arts Faculty 内の Languages, Cultures and Linguistics というセクション内に Japanese Studies という形で設定されている。 <http://www.arts.monash.edu.au/japanese/>
- ・教授陣、授業科目、授業内容などは全て WEB 上で公開されており、そちらを参照されたい（紙媒体での配布は、内容がすぐに古くなる、費用がかかる、などの理由から近年急速に行われなくなっている）。 <http://www.arts.monash.edu.au/japanese/about/index.php#whatcourse>
- ・モナシュ大学では現在、大学から日本語を始める初級者が増加しており、その多くが留学生である。しかしその後ずっと日本語学習を続けるとは限らない。
- ・レベルは以前は A < B < C < D < E となっていたが、現在は 1 初級～10 上級となっている。
- ・授業の進め方としては、セミナー（文法説明など）を 2 時間続きで行うが、他のチュートリアルは 1 時間である（筆者注：これは他大学でもほぼ同じ形式である）。
- ・一応到達目標はあるが、全体を通じてのシラバスらしいシラバスは存在していない。またオーストラリアの言語教育、特に大学の日本語教育においては、世界的な準拠枠に従おうという意識は少ない。
- ・今年に入り、中心的存在であったマウアー先生（社会学）、トキタ先生（邦

楽研究) が退職し、日本語プログラムの **deputy convener** (執行代理) は吉光邦子博士である。

- ・海外留学、特に交換留学には力を入れているが、きちんとモナシュにおいて正式履修登録を行って (留学先の科目がモナシュのどの科目の何単位に換算できるかを確認して) いる。



モナシュ大学 Menzies ビル



橋本博子博士 (研究室にて)

(Robotel について)

カナダの会社が開発したパソコン教室施設であり、言語教育でも用いられている。今学期から運用を開始したばかりである。

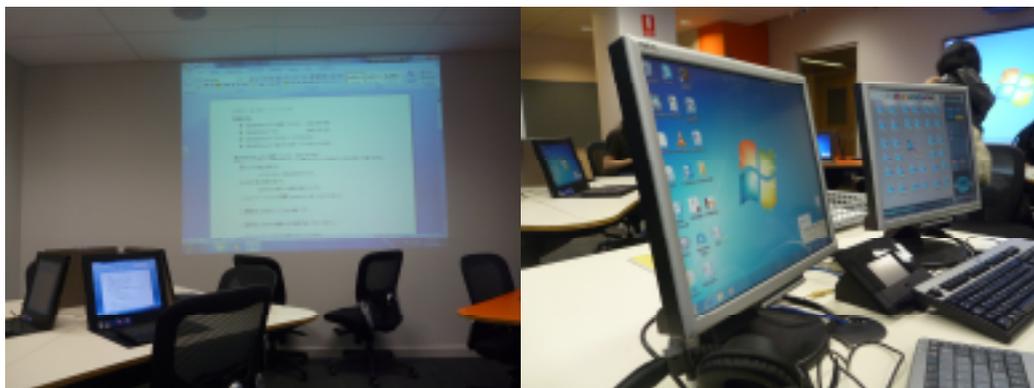
<http://www.robotel.com/en/>

実際に授業に参加した。ほぼ四角い教室に真ん中に教員用の机とパソコン、その周りに 8 つのテーブル、4 人ずつ位が座れる構造である (最多で 30 人くらい)。個人のパソコン画面があるが、4 人が話し合えるようにセッティングしてある。

四方全ての壁には、スクリーンがあり、そのうちのひとつがインターアクティブホワイトボードとして、パソコンにつながっている。つまりそのホワイトボード上で教師が書き込めば、それが他のスクリーンにも、学生のパソコンのスクリーンにも反映される。

担当教員もまだ機器に習熟しておらず、ワード作成文書を見せながら、レクチャーで説明を受けた文法事項についての確認の練習問題を順に行っていた。面白いのは、個人が黙々で行うのではなく、隣同士相談すること、教師に質問することを強く推奨していたことである。また授業時間が 1 時間で休み時間がないため、学生は授業開始後に入ってきて、5 分位前に出て行こうとする。したがって、正味 50 分の授業のため、のんびりしてられない。次から次へと練習課題を進め、すぐに解答の確認をする、というものであった。

こうしたハイテク機器を用いた教育は、オーストラリアでは急速に普及してきており、小学校レベルでもインタラクティブホワイトボード、高校では公立高校でもネットブックを上級学年生全員に使わせている所もあり、日本との大きな違いを感じた。



Robotel 教室の様子（授業中の様子は肖像権の関係で撮影できなかった。）

ラトロブ大学 田中リディア博士、渡辺裕司先生と面談（於 田中研究室）
2010年8月2日（月）11：50～15：30

ラトロブ大学はメルボルンの中心から北東 25 キロほどのバンデューラにメインキャンパス、他にもいくつかのキャンパスを持つ総合大学である。研究を重視するメルボルン大学、マンモス大学であるモナシュ大学とは異なり、教育にも特に力を入れている中堅大学と見られている。

<http://www.latrobe.edu.au/>

田中博士との面談に先立ち、渡辺先生とお話しする。渡辺先生は、以前東京外国語大学留学生日本語教育センターの専任教員であり、現在ラトロブ大学やモナシュ大学で教鞭に立っておられる。この日はたまたま車で 2 時間程度のところにあるバララット市のカソリック系高校の日本語教員、日本語を学んでいる高校生が大学見学に来ており、昼食時間を割いて、その案内を渡辺先生がなさっていた。それについて行くと、引率の日本語教員の一人が、私がメルボルン大学教員であったとき（約 15 年前）の教え子であったことが判明した。

わずか 10 分あまりの昼食時間に、渡辺先生と様々な話をし、旧交を温めた。私の知る限り、メルボルンにある大学はたいてい 1 時間授業であり、休み時間というものがない。9 時の次の授業は 10 時に始まるといった調子である。その上、モナシュ大学でもそうであったが、ラトロブ大学においても、ランチ

タイム（授業のない時間）は存在しなくなっている。つまり、通常オーストラリアでは、1時から2時がランチタイムであるが、1時から、その前の12時から授業は組まれている。学生数、授業数、教室数などのやりくりから、そうせざるを得ないとのことである。

渡辺先生も、この日は、10時から2コマ、1時から2コマのところ、12時から1時前まで、大学見学の高校生を案内していたのである。相変わらずエネルギーギッシュにキャンパスを駆け巡る渡辺先生の姿に頭が下がる思いであった。



ラトロブ大学中庭



田中先生、田中先生と

田中リディア博士と面談（於 田中研究室）

ラトロブ大学の日本語は、Faculty of Humanities and Social Sciences の中の、Asian Studies の中にあり、3人の専任教員がいる。岡野かおり博士は現在研究休暇中で、その代理として、渡辺先生が雇用されている。現在の日本語責任者は、田中博士である。もう一人のフォックスワース博士は、その日は不在であった。詳細はWEBを参照のこと。

<http://www.latrobe.edu.au/handbook/2010/undergraduate/humanities/disciplines/asian-studies.htm>

最初に調査の趣旨を説明し、後々の調査について、了承を得た。その上で、この場では、ざっくりと現状をお聞きすることにした。以下はその一部。

- ・ 日本のバブル景気前後で大きく、日本語教育は様変わりした感がある。バブル崩壊前は、1年生の登録者が120名を超えていたが、バブル崩壊後、就職の可能性が減ったと認知されたのか、大幅に減少した。
- ・ 現在はやや持ち直し、初級（1B）クラスの登録者が80名程度である。こ

れが 2 学期登録時には、40 名程度に減ってしまう。その後 2 年次登録者は 20 名程度である。

- 教科書は、「Genki I II」「日本語中級 J501, J301」など市販のものを用いている。
- 今の学生の多くは日本の漫画、アニメに関心があり、面白そうなので始めてみた、という者が多い。就職を期待してという者は少ないようだ。
- その代わりに、日本に留学をした上で、日本で就職といったルートをたどる学生もいる。
- 3 年の卒業（オーストラリアの大学は 3 年間で卒業）時に単位が足りなくなりそうなので、単位補充のために受講する学生もいる。
- 「中学や高校でやっていたから」という留学生、「漢字を知っているのだから」という中国系の学生・留学生の受講も多いが、辞めてしまう率が高い。
- 一方で、中高から続けていて、上級レベルに至る学生は徐々に増加してきているが、日本のサブカルチャーが好きという「オタク」的な者が多い。
- マンガやアニメを「日本語で見たい、読みたい」という者、「アメリカ文化よりも日本文化に関心がある」という者などが、日本語を受講している。
- 日本語を主専攻とする学生数は 10 年くらい変化はないが、ビギナーよりも、既習者（上級者）の割合が増えている。
- 他のアジア言語、例えばインドネシア語は、バリ島爆破事件などによるイメージ低下のせいか、学習者が激減している。一方、中国語では中国系の留学生が安易な単位取得のために受講する傾向があり、問題視されていると共に、オーストラリア人学生が学びにくい雰囲気があるようだ。
- 全体として、国際語とも呼べる英語を日常語とするオーストラリア人にとって、外国語を学ぶ意味は見出しにくい状況といえる。
- 就職に際しては、圧倒的有利さを誇るメルボルン大学卒業生とは異なり、とにかく大学名とは関係なく新聞やネットの求人に応募して、決まってしまう。大学が就職先や就職率を把握することはほとんどない。また教員も特殊なケース（例えば教員志望の学生のための推薦状書きなど）以外では、就職には関係しないので、卒業生の進路については、把握していない。オーストラリアの学生も、大学の教員に就職先を知らせることはしない。
- 日本研究について、「日本史だけはやりたくない」という学生は多い。歴史的に若いオーストラリア人としては、日本の歴史は長く複雑であるのかもしれない。また古典をやろうという学生も少ない。
- 現在オナーズ（卒論を書くことが許される 4 年生）は 5 名。司馬遼太郎、草食系男子、朝鮮総連、日本の政治家などについて研究している。つまり歴史を扱うにしても、近現代が中心である。

- ・ 現在、PhD の学生は 2 名。一人は神戸のマイノリティラジオ局の活動、もう一人はケータイ小説を研究している。マスターの学生はいない。
- ・ (田中博士が専門である) **Japanese linguistics** を学ぼうとする者は残念ながら少ない。
- ・ 日本への交換留学は、大学から 4~5000 ドルの奨学金(補助)が出るなど、大学としては推し進めている。実りある経験となるように成績の良い(80 点以上の)学生を選んでいる。

メルボルン大学 大橋純博士、野口幸子先生、ホール・ミシェル図書館司書と面談 (於 大橋研究室および University House)

2010 年 8 月 4 日 12 : 00 ~ 15 : 00

メルボルン大学はメルボルンの中心からトラムと呼ばれる路面電車で北へ 10 分ほど走ったパークビル地区に位置している。ビクトリア州で最も古く、かつ研究を重視する大学である。

<http://www.asiainstitute.unimelb.edu.au/programs/japanese.html>

訪問した筆者は、1994 年から 96 年にかけて、当大学日本・中国研究科で日本語教育にあたっていたが、現在は研究室も教室も新しい **Sidney Myer Asia Centre** という建物に移っており、学科も改組の後、**Faculty of Arts** 内 **Asia Institute** の中の **Japanese studies** という位置づけになっていて、当時の面影はない。当時から残っている先生は少なくなっており、大橋先生、野口元講師(一昨年退職後、現在は非常勤講師)、ホール元講師(現在日本関係図書館員)と再会することができた。



Japanese Studies のある建物



最近開始の市内自転車シェアシステム

(大橋博士からの聞き取り)

- 1年生の登録者は、一昨年 300 名、昨年 600 名、今年 620 名と急増し、90 年代初頭に見られた「日本語教育の津波現象」に倣い、「第二の津波」と私 (大橋博士) は呼んでいる。
- この急増には二つの要因がありそうで、一つは「メルボルン (大学) モデル」の実施である。これは日本の大学の教養科目のように、自分の専攻学部以外から広く好きな科目を履修することができるようになり、そこで外国語、特に日本語を履修登録する学生が増えたと考えられる。
<http://www.futurestudents.unimelb.edu.au/about/melbournemodel.html>
- もう一つの理由は、主にアジアからの留学生が、日本文化 (アニメ、マンガ、ファッションなど) への関心、漢字への親近感などから履修している。彼らはちょっとだけ試して、去っていく場合が多いので、「taster」(試食者) と私は呼んでいる。
- 2 学期には履修者は 300 人程度となるが、2 年次からは VCE 学習者 (大学受験のために日本語を学習した者) が加わるので、200 名程度が 2 年次に登録する。
- しかしこの VCE (高校レベル) での日本語履修者は減少傾向である。
- 学習動機においては、以前のように、日本語学習が就職に直結するのではといった短絡的期待を持つものは少なく、アニメのような「ソフトパワー」とでも呼べるものの影響が強い。
- BBC の調査にもあるように、世界の中で、日本は、ドイツに次いで、肯定的なイメージをもたれている。少なくとも、日本語を学ぶことは、本人も周囲も肯定的に評価するということも影響しているだろう。
<http://news.bbc.co.uk/2/shared/bsp/hi/pdfs/160410bbcwspoll.pdf>
- 教科書は 1,2 年生は「Yokoso」を、3 年生は J-301 を用い、4 年生は web やハンドアウトを用いている。
- 日本語、日本学を主専攻とする者は 30 名程度で、honours (4 年生で卒論を書く) は 2 名程度。今年の場合、別の大学から honours に入ってきた者は 4 名。
- 学部レベルから、修士、博士に上がってくる学生はほとんどいない (人気がない)。博士の学生も別の大学から入学してくる。
- 院生が少ない (つまり研究者養成ができていない) ことも本学の言語教育に対する改革 (締め付け) が始まった原因とも言える。上記のような急増する Taster (学習を続けず、1 学期、1 年で放棄する学生たち) のために、教員が授業を行い翻弄されるのは、研究大学を標榜する本学としては相応しくないと判断されている。

- ・ つまり大学当局としては、どこの学部学科においても、honours と postgraduate（大学院）の教育、研究機関にシフトしたいと考えている。教育、中でも基礎から始めるために、成果の出にくい外国語教育はますます軽視されてきている。学生数の少ない授業はすぐに閉鎖対象となる。
- ・ 大学の要求と学生のニーズがかみ合わない状況が生じており、担当教員は大きな疑問を抱きながら、授業を行っているというのが現状である。
- ・ 留学については、大学側も強く推奨しているが、対日本の場合、日本からの交換留学生が、こちらの英語の授業についていけないという理由でほとんど来られないという不均衡が生じていることが問題になっている。

その後、野口先生、ホール図書館司書を交え、意見交換した。中でも野口先生が以前調査を行っていた稲垣蒙志（戦前、メルボルン大学で初めて日本語教育を行った人物）についての情報は有益であった。ホール氏によると、当時稲垣が実施した日本語テスト用紙などはまだ図書館に保存されているとのこと、日本語関連の文献探索などにおいても、今後も協力を約束してくれた。



大橋博士

以上